



# 特別企画

新春対談

対談完全版

## 箕面山に1300年の歴史を刻む「勝運の寺」勝尾寺

— 人生の幕が閉じるその日まで 100%全力で、命の光を輝かせたい —

マーシュ総研株式会社  
代表取締役

清岡 義教



勝尾寺  
執事長

小嶋 隆文

MARSH SOKEN

マーシュ総研株式会社



マーシェ総研株式会社  
代表取締役

清岡 義教

勝尾寺  
執事長

小嶋 隆文

清岡：今回は、共によりよい社会を目指して青年会議所で切磋琢磨した同志であり、2021年度のJCI（国際青年会議所）会頭という大役を担われている小嶋さんとどんなお話ができるのか、楽しみにしてきました。

小嶋：こちらこそ、久々にお会いできて嬉しいです。今日はなんでも聞いてください。

清岡：境内の紅葉が本当に綺麗で。今日もたくさんの方で賑わっていますね。勝尾寺のことを少しお聞かせいただけますか？

小嶋：勝尾寺の起源は1300年ほど前に遡ります。現在住職を務める私の父で122代目です。当時この辺りは山岳修行のメッカで、たくさんの修行僧が訪れていたそうです。そこで出会った、双子の僧侶、善仲・善算と、桓武天皇の異母兄弟であられた開成皇子の3人が、膨大な大般若心経の写経を完成させるという誓いを立てました。そして、善仲・善算亡きあとも二人の遺志を引き継ぎ完成させた写経を安置するために、開成皇子が建てた道場「彌勒寺」が勝尾寺の始まりといわれています。境内にある開成皇子の墓には、今でも年1回宮内庁の職員が来られて、法要を行っているんですよ。

清岡：皇室と関わりの深いお寺なんですね。しかも最初は違う名前だったのですか。

小嶋：そうなんです。実は今の「勝尾寺」という名前も6代目の住職であった行巡上人が、当時の帝、清和天皇の



病を法力で治したことで授かった、皇室にゆかりのある名前なんです。天皇である「王」がどんな手をつくしてもよくならない病を治した＝王に勝った寺ということで、最初「勝王寺」を提案いただいた

たそうですが、恐れ多いと「王」を「尾」に変え、「勝尾寺」の名を頂戴したと聞いています。当時たくさんのお供を引き連れてこの地までお礼参りに来られた清和天皇の絵図も残されているんですよ。

清岡：それが「勝運の寺」と呼ばれる所以なのですね。それも他者を負かすことで得られる勝つではなく、どんな困難にあっても立ち上がり「己に打ち勝つ」ことをみなさん誓いに来られる。当社も来年50周年を迎えるにあたり、社員一同で「勝ちダルマ」を授かりに来ようと思っています。

小嶋：「勝ちダルマ」は、立てたその1年の目標を叶えるためにあらゆる努力を惜しまないことを誓う、いわゆる契約書なんですね。だから目入れは拇印をすすめています。でも本当に大切なのは、叶うことではなくそのプロセスなんです。目標に向かい、1年をどのように過ごしたのが大事。その報告をお聞かせいただくために、叶っても叶わなくても、お返しにきていただいています。

清岡：確かに。人事を尽くせたかどうか。本当の価値はそこにあると私も思います。

## 小嶋 隆文

宗教学者勝尾寺 責任役員・執事長

1981年生まれ。	2012年 JCI大阪 入会
大阪府出身。	2018年 JCI副会頭(ヨーロッパ担当)
英ロンドン大学卒業。	2019年 JCI大阪 理事長
宗教学者勝尾寺責任役員・執事長	2020年 JCI常任副会頭(アジア・太平洋地域担当)
	2021年 JCI会頭

## 勝尾寺は先祖供養の寺 感謝の気持ちが大願成就に繋がる

小嶋：古くからこのように「勝運の寺」として信仰を集めてきた当寺ですが、実は先祖供養を最も大事にしている寺なんです。

清岡：それは初めて聞きました。

小嶋：勝つに限らず、人は生きている間ありとあらゆる願望を抱きます。私たちは、それを果実だと考えています。その果実を大きく立派に育て「もぎ取る＝願望を叶える」ためには、実際に果物を育てるように養分が必要です。養分は根が吸い上げますよね、英語でいえば根はルーツ。つまり私たちを果樹に例えるなら、根（先祖）に養分（感謝）をしっかり与えないことには、大きな実を实らすことはできないということです。先祖供養という字は、養を供えると書きます。先祖を大切に思う気持ち、感謝の想いが目には見えないハイポネックスになって、それを先祖が吸い上げて、自分たちの幹を育て、自分や家族、社員といった大切な人たちの健康、幸せ、成功という果実を大きく実らせていく。この土台なくして、決して大願成就はないのです。

清岡：なるほど。「勝運の寺」には、そのような意味が隠されていたんですね。

小嶋：私はこの勝尾寺で生まれ、ここをわが家として育ちました。でも、歴代の住職やお弟子さん方が守ってこられたこの場所に、ただ住まわせていただいているだけという感覚なんです。周りに何も無いこんな山奥まで、勝尾寺だけを目指してみなさんお参りに来てくださる。先代たちが築き上げてくださったそんな魅力ある場所をどう次代へ繋いでいくのか。自分がもし将来お預かりさせていただけるなら、絶対に素晴らしい形でバトンを託せるよう感謝の気持ちを胸に毎日懸命に生きていこうと決めました。

清岡：私も代表取締役ではありますが、小嶋さんと同じように常々ただ場所を借りているだけという意識なんです。会社は社員と一緒につくっていくものであって、私の所有物ではないと。だから後継者も世襲にこだわらず、社員の中から引きあげたいと思っています。

小嶋：勝尾寺もまさに世襲ではなく、信頼関係のもと弟子が引き継ぐ形でここまで来ました。血ではなく、お前に任せたいという想いで1300年という歴史が刻まれてきたんですよ。

清岡：そうだったんですね。実は当社も「安心・信頼・感動」を経営理念に掲げていますが、中でもその「信頼」を最も大切にしているんです。社員との信頼関係、お客様との信頼関係、保険会社との信頼関係、地域社会との信頼関係、それなくして会社は成り立ちません。コロナ禍においてもよりその絆を深める努力をしてきました。例えば、ボランティア活動やスポンサー契約の継続に尽力したり、社員が家族とコミュニケーションを取りながら気持ちよくリモートワークができるようお手紙付きのお肉を贈ったり。今があるのは過去からの信頼の積み重ねであり、これからの信頼の積み重ねが自分やマーシュ総研の未来をつくる。「信頼」ほど大切なものはないと思っています。

## 漫然と生きることなかれ 常に100%で、命の光を輝かせたい

清岡：ここは本当に自然豊かで、紅葉もみごとですね。

小嶋：ありがとうございます。長い日で2時間半、境内の散歩を毎日の日課にしているのですが、これがまるで動く座禅のようで、さまざまな気づきが下りてくるんです。先日はふと暦の勉強をしたくなりそのこと



がきっかけで、人生の砂時計を強烈に意識するようになりました。サウナって、我慢の限界まで砂時計を何回もひっくり返すじゃないですか。でも人生の砂時計は非情にも一度スタートしたら二度とひっくり返すことはできなくて、どんどん砂がこぼれ落ちていく。そして無くなった瞬間、どういう形であれ人生の幕が閉じてしまうんです。しかも、あとどのくらい砂が残っているのか、見ることはできません。私はその時はじめて、死の意味を腹の底から理解しました。その日から、こぼれ落ちていく砂を一粒残らず輝かせてみせると、目が覚めてから眠るまでどんな時も100%全力で生きる決心をしたんです。

清岡：なるほど、大きな転機を迎えたと伺っていましたが、そういうことだったんですね。私もまさに人の一生に寄り添う仕事をしていますが、「不安」という負のエネルギーによっていかに人生が狂わされているのか、まざまざと感じています。例えば、経営者は取引先や顧客、従業員とのトラブルによって、金銭的にも精神的にもダメージを受け、100%本業に力を注げないケースが多々あります。また、今回のコロナ禍で不安を感じ、仕事に身が入らない人も少なくありません。そんな「不安」を軽減し、全力で日々仕事に奮闘できる環境をサポートできる一つに保険があります。保険は有事の時はとりくずして活用したり、大きな賠償を被った場合にお支払いすることができます。一度きりの人生、どう生きるのか。小嶋さんのように100%で動きたくても動けないでいる人の力になれるものが保険だと、コロナを経験しさらに実感しました。

小嶋：今年度JCI会頭という職務を通して、世界中の方々とお話する機会に恵まれました。私もそこで感じたのは、個の大切さです。ただ生きるのではなく、一人ひとりがしっかりとありのままに輝いているかどうか、本当に大事なそこなんですよね。

清岡：会社や家庭も同じですね。社員や家族一人ひとりが輝いているからこそ、お客様へ素晴らしいサービスをお届けできるし、あたたかな家庭を築けるのだと思います。

小嶋：例えば仕事が忙しく、毎日10分しか子どもと遊べないお父さんがいたとします。でもその10分、毎日100%

## 特別企画 対談完全版

で向き合ってくれるお父さんの姿は必ず子どもの心に響くと思うんです。私自身は、自分がその日どんな時も100%で生きられたかどうか、寝る前に確認しているんですよ。海軍で受け継がれている「五省」はご存知ですか？

清岡：私にとっては初耳ですね。

小嶋：

### 一 至誠に悖(もと)るなかりしか

〔誠実さや真心、人の道に背くところはなかったか〕

### 二 言行に恥づるなかりしか

〔発言や行動に、過ちや反省するところはなかったか〕

### 三 氣力に欠くるなかりしか

〔物事を成し遂げようとする精神力は、十分であったか〕

### 四 努力に憾(うら)みなかりしか

〔目的を達成するために、惜しみなく努力したか〕

### 五 不精に亘(わた)るなかりしか

〔怠けたり、面倒くさがったりしたことはなかったか〕

海軍の生徒たちは、1日の終わりにこの五省をもってその日を振り返り、日々の行為を反省し、次の日の修養に備えるのだそうです。私も毎晩五省を唱えて自分自身と向き合い、明日をどう生き切るのか、自問しています。ぜひ清岡先輩も取り入れてみてください。

清岡：さっそく取り入れますね！いや、今日は初めて聞くお話も盛りだくさんで楽しい時間を過ごさせていただきました。いつも全力投球だったJC時代と変わらず、熱い小嶋さんに会えて、なんだか懐かしかったです。素敵なお話をありがとうございました。

小嶋：こちらこそ、遠いところまでお越しいただきありがとうございました！

ぜひともよろしく願いいたします。

